子どもから大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を

文化高知

2000年9月　NO.97

「いろとあそぼう ACT99」　増田和剛

〈もくじ〉

大学と地域連携 …… 山本晉平　2
高知と父 …… 大塚恭男　3
高知のまちは美しくなったか …… 伊藤憲介　4～5
韓国を訪れて～近くて遠い国～ …… 伊藤博美　6～7
魚談義あれこれ②日本の魚 …… 岡村　収　8～9
こんなことがあったぞね・城下の青春 …… 中山俊子　10～11
人に志あり …… 松本秀正　12
ぐうの音も㊂－詩作りと誌作り－ …… 西岡寿美子　13
風俗歳時記・風伯 …… 14～15

(財) 高知市文化振興事業団

大学と地域連携

山本晉平

従来、大学は知の伝承（教育）と創造（研究）の機関であるとされ、総合的には人材養成と人間形成であった。しかし、21世紀の大学像は「量から質へ」、「画一から多様（個性化）へ」、「規制から競争へ」、「夏炉冬扇時代から不易流行時代」と移行して、大学には第三の役割、「地域連携と地域の活性化」が求められている。また、産業界のみならず、社会・文化・環境など各領域の活性化への貢献、地域住民の生涯学習機関としての役割も期待されるようになっている。しかもこの新たな大学の役割は地域社会における大学の存在理由を問い、大学の生き残りにかかわる問題として、その対応を迫られているところにその特徴がある。このような状況下で大学は学部は教養中心、大学院は専門中心へ、研究は体系化・ネットワーク化へと移行している。他方、学生の質的変化、独立行政法人化の動き、地域との連携、産業活性化などの状況下で大学の理想像は過去の「夏炉冬扇」からは加速的に離れている感がする。

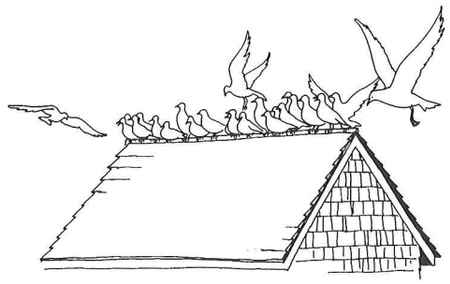
アメリカでは一九八〇年、バイ・ドール法の成立を境に大きく変化し、九〇年代を通してベンチャー企業など新産業の育成に大学が大きく貢献し、地域の経済成長を支えるという構図が出来上がった。その結果、ケンドル・スクエアでのバイオ研究、シリコンバレーでのコンピューター関連技術では、大学の教育・研究機関と先端産業界並びに地域経済との密着性が経済成長のエンジン役として働いている。戦後の日本では産業界の科学技術で著しい経済発展を遂げ、各地にテクノポリス（技術の街）を発展させてきた。しかし、経済の低成長期、バブル崩壊後の回復の兆しが見えない現今の日本でも遅ればせながら、21世紀への発展の起爆剤として大学と産業界に多種類の連携（大学等技術移転促進法、産業技術力強化法など）が設定され始動している。

人類が21世紀に未曾有の変革期を迎えることは万人の認めるところであり、その未来を拓くために新しい科学の創造が期待されている。学術の世界においては構造的な変革が模索されており、人間を視点の中心に置いて、現在の専門分野をより深く極めると共に、隣接諸分野との連携を強めて常に新しい体系を探る必要がある。世界的視野で見ると研究は19世紀は大学の時代であったかも知れないが、21世紀は20世紀の延長ではない「智」の世界であり、融合・連携の下に動かなければならないと考えている。

21世紀の大学に課せられた使命は、従来の科学技術がともすればないがしろにしてきた「心」の動き、「知」、「智」の働きを科学の分野に取り込むことによって、細分化された学問の総合化を試みると共に、科学技術のパラダイムの拡大を図り、新しい時代の人類社会に貢献することであると考える。しかし、大学は大学、地域は地域という本来の姿があってこそ連携・協力があるのであって、大学が地域と同じような姿になり、地域が大学と同じ姿になるのでは日本の産業も科学も衰退して行くので、相互の役割分担を明確にすべきである。

「学問も事業も究竟の目的はすべて人情のためにするのである」（西田幾多郎）の言葉が脳裏を横切る昨日今日である。

（やまもとしんぺい／高知大学学長）



高知と父

大塚恭男

『文化高知』誌にエッセイをとのお言葉をいただき恐縮しております。私は昭和五年一月二十九日に高知県香美郡日章村田村乙八八五に生まれました。希斎、恭斎、恵廸、敬節と四代続いて私、恭男で医師としては五代目となります。恵廸までは産婦人科を主としていましたが、父敬節がある時に漢方に開眼して尊敬していた湯本求眞に師事すべく上京したのが昭和五年二月のことでした。当時のことですから高知の桟橋から旗を振って別れを惜しんだことであろうと思われます。次の年には家族を東京に呼び寄せたので、私は高知には一年いたのみです。

大塚家には「成人になると外に出て行く」習性があるらしく、父のすぐ下の弟の貫一は少年の頃に満鉄に入って、単身満州に行ったし、その下の弟の和は外国語学校（現東京外国語大学）のロシア語に入学し、映画人として生涯を送ったのです。

父敬節のことは昭和五十年二月の『日経』の「私の履歴書」に、また叔父和のことは、昭和六十年の『高知新聞』の「南風対談」に載せられました。

こうして少年の頃から独歩を余儀なくされた三人の兄弟は詩、短歌、散文などにうっくつした日々を送ったのではないでしょうか。

ここで先に述べた恭斎の弟に仰軒という変人がいます。彼は東大医学部の前身である大学東校を中退し、石炭王をめざして四国の山を歩いていました。ところがそこで偶然にもドイツ人医師であるエドモント・ナウマンに遭遇。ドイツ語が堪能だったことからナウマンと親しくなり、領石の恭斎の家に案内しました。その折にナウマンがドイツ語と漢文で墨書した扁額が残っています。「学専見聞命博経験」、"Wissen macht gelehrt, aber erst dos Leben macht den wissenden weis"とあるのがそれである。医学史や地質学史を研究している方が時にお出でになって写真をとっていかれたりします。

ここで父のことに話をもどしますが、父が大変尊敬していた同郷の先輩に植物学の権威であられた牧野富太郎先生がありました。父は漢方を専門としていたので、薬草について牧野先生にお教えをいただき、そして子供だった私は、しばしば薬草園に連れて行ってもらったものです。

今秋の体育の日に高知の佐々木知良医師達が父敬節の記念碑を牧野植物園内に建立してくださることはまことに感謝に堪えません。除幕式の折に久しぶりに高知に行けることを楽しみにしている次第です。

結びに父が故郷を歌った短歌の幾つかを御紹介させていただきます。

土讃線に乗ればなつかし故郷（ふるさと）のなまりで話す人々の声

ふるさとの鎮守の森に夜毎鳴きし梟（ふくろう）の声を聞かず久しも

父母も吾子もねむれる故郷の共同墓地にあざみは咲けり

日章村にて

ナウマンが地質調査に来しといふ領石の山に祖父もねむれり

ふるさとの家はなつかし凌霄花（のうぜんかずら）松にからまりて咲けるころなり

ふるさとは感傷をよぶ十六の少年となりて海に向える

若き日に往診に通ひしたんぼ路今も咲くらむしいれえの花

土佐にては、まんじゅしゃげをしいれえとよぶ

ふるさとの街を見んとて登りたる正蓮寺山は雨にけぶれり

細木病院別邸にて

（おおつかやすお／北里研究所付属東洋医学総合研究所名誉所長）

高知のまちは美しくなったか
――都市美デザイン賞を総括する

伊藤　憲介

戦後復興をテーマにした都市政策は、車社会での機能主義を標榜してきたため、全国的に都市空間の画一化が進み、地域の個性は喪失した。しかし、都市が成熟するにともない、まちなみや都市景観に対する関心が高まり、自治体における都市デザイン行政、景観行政、まちづくり活動が始まることとなる。一九五八年には高山京都市長が「教育委員会は教育を、文化は私がやる」として、行政の文化化の先鞭をつけたが、その後、横浜市での「高速道路の地下化」に始まり「地下鉄の総合サイン」「山手地区景観風致保全要綱」「馬車道」などについて国や関係セクションさらには市民との関係調整が行われた都市デザイン行政は有名である。

わが高知市では一九八一年に高知市文化行政研究委員会を発足させ、「新しい文化都市創出をめざして―十六の提言―」をまとめている。ここでは文化振興事業団の設立等が提言されており、準備のあと一九八四年に(財)高知市文化振興事業団が発足した。

その第一段として第一回の都市美デザイン賞選考がはじまった。この賞は、優れたデザインによって親しみややすらぎを感じさせ、周辺のまちなみや景観に好ましい影響を与えている建築物等を広く知ってもらい、個性的で活力あるまちづくりを推進するとして高知市内の建築物等を自薦他薦を問わず推薦してもらい、建築、都市計画、文化、美術などの専門家と学識経験者で構成する選考委員会で審査し入賞者を決定してきた。

最近の現代建築における課題は、建築空間の新鮮さや造形性だけでなく、地球環境的・都市景観的な視点からのあり方が求められており、都市美の審査においても建築賞的感性での評価でなく、その場所性を解読した空間形態を評価することに重点が置かれている。

第一回の選考にはゲスト選考委員として香川県の建築家山本忠司氏（故人・日本建築学会賞受賞者）を招き、入賞三点（特賞なし）が決定されている。その後、現在まで十六回と回を重ね、設計コンペで話題となった「高知県立坂本龍馬記念館」（第八回）、はりまや橋公園の整備等と併せた「はりまや橋商店街木造アーケード」（第十五回）及び地形に埋没する木造ハイブリッド工法の「高知県立牧野植物園牧野富太郎記念館」（第十六回）の特賞三点を含め全部で四十四点の建築物等が受賞している。

これらに関連しながら、一九八八年に、市民主体の文化を具体的にどう発展させていくかを、市民的立場で考えていこうということで、関田英里高知大学名誉教授を座長に「高知の文化を考える会」が発足し、そこで「わがまち百景」を公募し選定を行った。

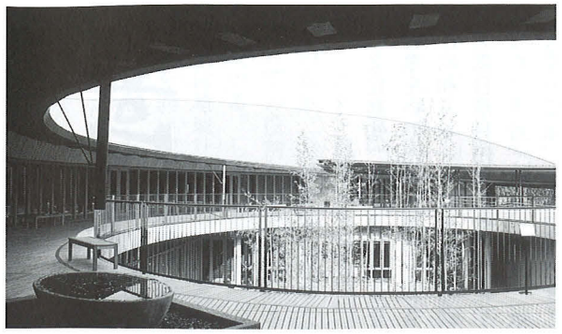
都市美デザイン賞が新しいものを対象にしているのに対し、高知市内にある歴史の香り残すまちなみや、心なごむ場所、高知らしい風景などを対象としている。これは一九九〇年に、〝21世紀に伝えたい高知市の風景〟として『わがまち百景』が文化振興事業団から出版された。続いて、一九九一年に『高知の文化を考える』を発刊し、ここでは「風格ある都市づくりと景観」として都市景観条例の制定や、「市民文化の創造をどう進めるか」では文化振興条例の制定などを提言している。また、一九九一年に都市景観ガイドプラン策定委員会による調査が行われ、「人と自然にやさしいフォルム」都市景観ガイドプランが策定された。ここでは、高知市全域の構想として「都市景観ガイドプラン」、その中で特に重点的に整備を図る区域については「地区景観ガイドプラン」という提案がなされており、「高知らしい美しいまちなみと都市景観を備え、うるおいとやすらぎ、そしてふれあいのあるまち」の実現に向けての方向性が示唆されている。また、一九九五年には、高知市文化振興ビジョン策定委員会により「高知市文化振興ビジョン」が策定された。これは高知市の文化行政を総合的に展開するための指針であり、都市景観関係では「やすらぎとうるおいあるまち」の項において「親しみある生活空間の形成」や「文化性豊かな公共空間の創造」について施策の方向付けをしている。さらにビジョンの推進に向けての具体策として「都市美条例の制定」などが示されている。

これらにより、一九九六年には「高知市都市美条例」が施行され、さらに高知市文化振興懇話会や高知市都市美審議会も発足した。そして翌年には都市景観ガイドプランをベースに「高知市都市美形成基本計画」も策定され、高知市における行政の文化化は大きく前進した。都市美デザイン賞についても、都市美条例による総合的な施策として顕彰制度を位置づけしたため、文化振興事業団主催による選考は二〇〇〇年の第十六回で最後となった。しかし、この文化振興事業団による都市美デザイン賞は今後発展的に継承する形で行政により実施される予定である。

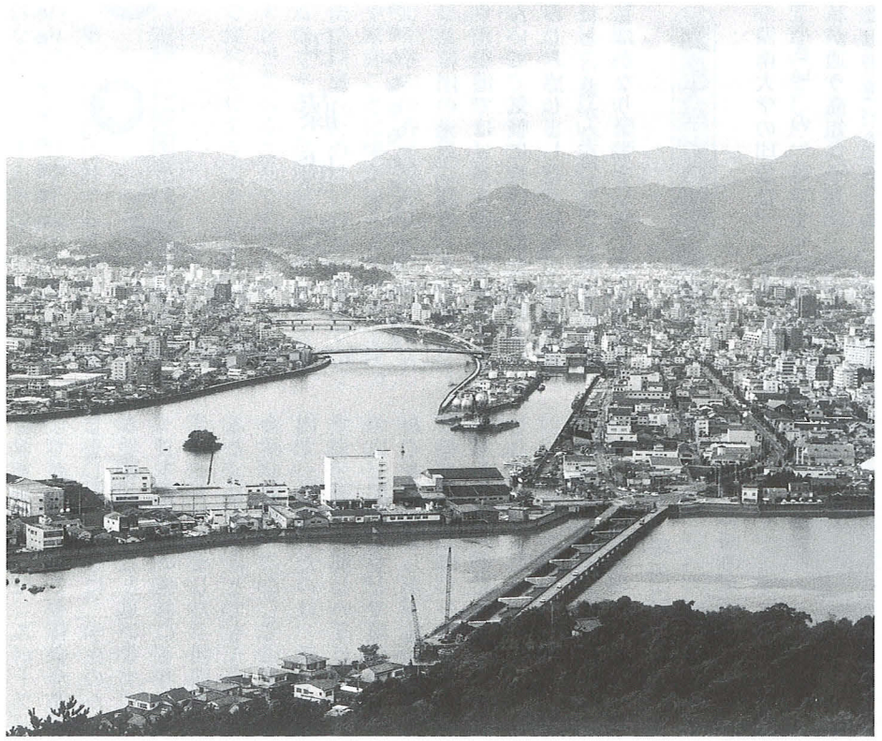
いままでの十六回の選考を通じて感じたことは、建築を中心とした都市施設のあり方は、発展の結果として自然を支配する論理が命題であり、たとえ災害に対応するとしても、それは人間の生活活動による地球環境への負荷を大きくすることであり、都市の本質として必要な生活環境の維持は、自然の復元力だけでは不可能となってしまったことを実感させられるものであった。

美術の先生方が指摘する都市風景では、建築家に限らず一般市民も含め、人工物をテーマにした都市景観という概念を見直し、自然と人間が共生する環境の構築と、その風景のあり方を追求するという価値観を自覚することが必要な時代となっている。

（いとうけんすけ／㈳高知県建築技術公社参事）



第16回都市美デザイン賞特賞
高知県立牧野植物園　牧野富太郎記念館

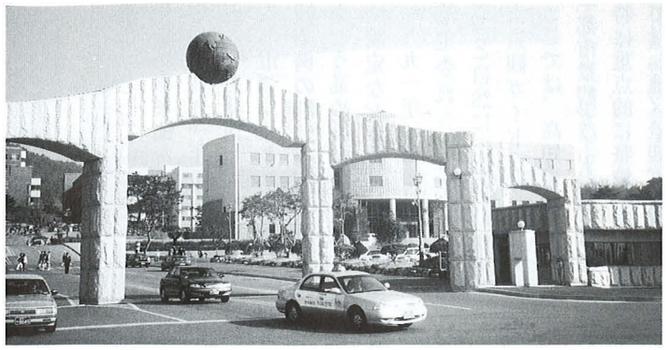


五台山公園から市街地を望む（『わがまち百景』より）

韓国を訪れて

～近くて遠い国～

伊藤博美



正門から見た湖南大学（車は右側通行）

そもそも私が韓国に行くきっかけとなったのは、高知女子大学社会福祉学部の地域社会学（担当：玉里恵美子助教授）の講義のなかで韓国が取り上げられたことです。初めは、キムチ、チマ・チョゴリ、エステといった、マスメディアからの情報ぐらいしか思い浮かばなかったというのが本当のところです。現在のように多くの日本人が韓国を訪れる状況のなかで、余りにも知らなさ過ぎることが恥ずかしかったです。半年の講義が終わった三月、韓国を訪問するという先生方と一緒に出発することになりました。正直言って自分が行くとは夢にも思っていなかったのです。

平成十二年三月十三～十六日、高知から大阪、ソウルと乗換えて、やっと韓国の光州に到着しました。ソウル空港では日本人観光客がたくさんいて、気軽に行ける国なのだとしみじみ感じました。初めての海外旅行と言葉が全然わからないことで、私はかなり緊張をしていました。

湖南大学と学生

湖南大学の印象は、「大きい」の一言です。私が通う高知女子大学とは桁違いの広さと、大きさでした。日本の大学と違うところは、大学内にカラオケや美容院、ゲームセンターや卓球場があることです。これらには本当に驚きました。また、スポーツジムにしても食堂にしても料金が安いと感じました。まさに、学生のためにある学校といえると思います。

日本語学科の講義にも特別に参加させてもらいました。四回生ともなると、日本語はとてもうまく、日常会話は難なくこなしています。大学内で一番驚いたのは、学生の勤勉さです。テスト前というわけでもないのに、図書館などで勉強する学生がたくさんいました。勉学に取り組む姿勢や時間を惜しむようなその姿に日本との違いを見たような気がしました。

デパートで店員さんと

日常生活

やはり、韓国の女性は美しいし、スタイルもいいので、羨ましい限りでした。韓国の女性はあまりスカートをはかないようで、ジーンズとピンヒールで、颯爽と歩く女性が多く見られました。

キムチの山また山！

三月十四日はホワイトデーとあって、店先にはプレゼントがたくさん売られていました。度肝を抜かれたのはそのプレゼントの大きさです。とにかく包装に力を入れているというような感じで、花束でも包装のおかげで二、三倍の大きさになっているのです。恐るべし、韓国のホワイトデー。日本では、これほど大きな物にはならないだろうと思います。

ホームステイ先の張（チョウ）さんと張さんの友達を含む五人で街へ買い物に行きましたが、その雰囲気は日本の学生と変わりませんでした。かわいいものを見つけては店に寄り、気になるものがあれば近づいていく。特にキャラクターグッズのところには、中・高生が多く集まっていました。なんとなく親しみを感じました。また、韓国では女性同士が腕を組んで歩いているのをよく見かけました。友達同士で腕を組むことに対し、最初は違和感がありましたが、実際にやってみるとなかなか楽しいものでした（人ごみの中で迷子にならなくてすみましたし）。

木浦共生園

街中は日本と変わらないと思いました。日本と同じ某アイスクリーム店も、某ハンバーガー店もあって、正直言って驚きました。また、韓国には割り勘というものがないらしく、悪いと思いながらもチゲ（野菜や肉を入れて煮込んだ鍋料理）をおごって貰いました。とてもおいしかったです。

食文化

韓国といえばキムチ。どこで食事をしてもだいたいキムチが出てきました。しかし、思ったほど辛くなく、いろいろと食べることができました。白菜から始まり、大根、きゅうりなど様々な野菜が使われていました。たくさんの香辛料が使われていて店や家庭ごとに味が違うようです。作法で戸惑ったのは、おかずは箸で取るのですが、御飯を箸ではなくスプーンで食べることです。ついつい箸で食べてしまうこともありました。

実際に韓国を訪れて

第一に韓国に対するイメージが変わりました。日本を嫌っているのではないか、日本人を憎んでいるのではないかと思っていましたが、少なくとも私が出会った人たちはとても優しく、友好的でした。私の名前が「伊藤博文」に似ているということから「関係があるのでは」と思った人もいたようで、自己紹介のたびにざわめきが起こるというハプニングもありましたが、今ではいい思い出です。

寺院観光や木浦での日帝時代の日本人居留地や博物館の見学、共生園訪問など、忙しい中でも充実した四日間を過ごすことができました。中でも、一番興味のあった共生園訪問では園長の田内緑さんに実際にお会いし、お話を聞けたことがとても嬉しかったです。

近くて遠い国だった韓国はちょっとだけ近い国になりました。実際に訪れてみると、言葉以外の心配はそれほどなく、心配するよりもまずは行動をしてみるということが大切だと思いました。

今回の訪問では、張さん、湖南大学の学生さん、金居先生、尹（ユン）先生、玉里先生など多くの方々にお世話になり、貴重な体験ができたことを心から感謝します。ありがとうございました。

（いとうひろみ／高知女子大学社会福祉学部学生）

魚談義あれこれ

②日本の魚

岡村　収

現在、地球上に生息する魚はほぼ二五、〇〇〇種と見積もられた。では、日本産魚類はそのうちの何%を占めているのであろうか。日本の海域を二百カイリ内と限定すると、この範囲で記録された魚は三、六〇〇～三、七〇〇種と概算され、世界産の一五%に達する。一国に産する魚種数としては圧倒的な値である。

魚の種類数が多く、また量も豊富であることは、日本列島をめぐる魚の生息環境が多様であることを示している。地理的には北緯二四度から四六度にわたって南北に長く、千島弧・本州弧・琉球弧・七島マリアナ弧（伊豆―小笠原諸島）などの島弧が複雑に入り組んでいる。また、列島を構成する島々の数は、三、〇〇〇を超え、海底地形も複雑である。英語で日本は、ジャパニーズ・アーキペラゴウと呼ばれる。その意味は陸地に重点を置くと日本群島、海洋に重点を置けば日本多島海となり、いずれも地理的環境の複雑さを表している。複雑な環境は多様な生物種を生み出す最大の原動力である。

さらに、日本は全く性状の異なる海洋に四方を囲まれている。北はオホーツク海から西は日本海、南西方向は東シナ海で、東は北太平洋西部のきわめて広い範囲に及ぶ。また、海流の複雑さも豊かな海洋環境を形成する要因である。世界でも著名な二つの海流、北からの親潮は寒流として南下し、南からの黒潮は暖流として北上し、日本の東西両岸を洗い、せめぎ合っている。この地理的要因と海洋的要因が絡み合って複雑な環境を構成し、豊かな日本の海洋生物相を生み出しているのである。

日本の魚類相を具体的に解説すると、ベーリング海やオホーツク海と共通する北方系魚類（ニシン・タラ類・カレイ類など）、日本海に固有の種（アサバガレイなど）、太平洋側の固有種（アカメ・ミナミクロダイなど）、南シナ海や南太平洋と共通する南方系魚類（スズメダイ類・チョウチョウウオ類・ブダイ類など）に加え、カツオ・マグロ類やネズミザメのような広域回遊性魚類、アオメエソ（めひかり）類・ソコダラ類・チョウチンアンコウ類のような世界的分布を示す深海魚などが日本近海で混交しているのである。

日本周辺海域の魚類相が詳細に明らかにされ、記録種数が飛躍的に増大し始めたのは一九七〇年以降のことである。その要因の一つは日本周辺海域における各種調査船の活躍であり、いま一つはスキューバダイビングの普及である。前者の一例として、水産庁による日本周辺二百カイリ水域内の大陸斜面未利用資源の開発調査が挙げられる。これは、日本漁船による水産資源の簒奪という、世界各国からの非難への反省から生まれたものである。調査は北海道から東北沖、土佐湾から九州―パラオ海嶺、沖縄本島西側の沖縄舟状海盆周辺（東シナ海）の三海域で行われた。調査成果の分析は、第一海域を北海道大学、第二～三海域の二つを高知大学が責任校として分担した。水産上の成果は目覚ましく、キンメダイ一種だけで年間漁獲量六千トンに達する新漁場も発見された。一方、未調査海域であるだけに学術上の新発見も素晴らしく、魚だけでも一五〇種もの新種と日本初記録種が得られた。これは、当時の日本魚類学会における十五～二十年分の発表記録数に匹敵する成果であった。

九州―パラオ海嶺で漁獲されたキンメダイの山

一九五〇年代に導入されたアクアラングは、当分の間は少数の水中技術者の用具にすぎなかった。しかし、感動的な海中景観とさまざまの華麗かつ奇異な海洋生物たち、それをじっくりと観察できるスキューバダイビングの素晴らしさが口コミで広まり、一九八〇年代には街のインストラクターやダイビングスクールの指導で、レジャーダイバー人口は爆発的に急増した。海中景観の観察やフィッシュウォッチングが主流となるにつれ、感動的なシーンを自分のものとしたい、周辺の人々にも見せてやりたい、と願うのは人の情けである。その想いを助長したのが水中カメラの発達で、今では潜水技術さえマスターすれば、誰でもが簡単に水中撮影を楽しめる時代である。さまざまの派手やかな、また奇妙な習性をもつ、多種多様な魚たちが世に知られることとなった。海中景観に優れた場所は、漁具も調査器具も使用できない所が多く、知られざる生き物たちの棲み場であったからである。

沖縄の枝サンゴと魚

日本の周辺海域は北は北方系の、南は南方系の魚が定着あるいは来遊し、中間地帯は温帯性と北方系または南方系の魚たちが混交することで賑わいを見せる。また、沖合いでは春に広域回遊魚であるカツオやマグロが北上し秋口に南下の様相をみせ、サンマなど北方系の魚たちは逆の現象を辿る。このような四季折々を巡る魚類相の移り変わりを、古人はよく知り、生活習慣に取り入れ、古歌や俳句、川柳にと詠ってきた。

〝目には青葉山ほととぎす初松魚〟は素堂のあまりにも有名な句で、上りガツオの香りと味の良さを示している。昨今は脂ののった秋の下りガツオが一般受けしているが、現在の初ガツオは日本沖への回遊を待たず、台湾近海など南方海域で漁獲したものが大半である。これは不味い。旬の魚であるウナギも、すでに万葉の時代に〝石麻呂に吾れ物申す、夏痩に吉しと言う物ぞ、武奈伎取り食せ〟とある。旬のものであるばかりでなく、滋養食であることを古人は知っていたのである。また、魚の生態を知り、漁法が詠い込まれていることで、魚種の区別さえできることがある。〝月もおぼろに白魚の、かがりも霞む春の宵〟は歌舞伎「お嬢吉三」の名文句であり、〝水際や白魚見ゆる網の中〟は野田別天楼の句である。両方共に白魚が詠い込まれているが、前者はアユやワカサギに近いシラウオであり、後者は全く別の分類群、ハゼ科に属するシロウオである。両種共に春海から川へと産卵のために遡上するが、前種は夜間の遡上で光に集まる習性があるためかがり火で集めてのすくい取り、後種は日中の遡上を水底に仕込んだ四ツ手網の上の通過を見定めてハネ上げる情景を詠ったものである。

日本の東西を問わず、魚で味覚の筆頭に挙げられるフグはサシミ、チリ鍋、味噌汁、干物と何にでも向く。韓国でも最近食され始めてはいるが、フグ料理といえば何と言っても日本が世界のトップである。にも拘わらず、来日した外国人研究者に奨めても、顔を顰めて仲々に応じない。〝フグは喰いたし、命は惜しし〟で、フグ毒の怖さをよく知っているからである。しかし、種類による毒の有無、有毒フグであっても卵巣など体部による毒性の有無と強弱などを知っておれば怖い魚ではない。とは言っても、フグ毒に関する知識は先人が身を挺して得た教えであることを古川柳がよく物語っている。「さて、ぐち（おろか）な輩だとフグやめになり」で相談まとまらず、「フグ汁をくわぬたわけにくうたわけ」と論議が定まらぬままに料理し始めたものの、「皆殺しだぞと鍋蓋おさえてる」で覚悟が決まらない。ところが食べ始めると旨さのあまり「てっぽうの皮をくれろと三杯め」となり、大抵は「あら何ともなやきのうは過ぎてフクト汁」で済むが、時には「雪の晩ふぐだんべいと藪医起き」と医者が必要となり、喉元の熱さを忘れて「永らえば又此のごろはフグをくう」うちに悪運つき、「片棒をかつぐ夕べのフグ仲間」と仲間に棺桶を担がれる破目となる―『古川柳にみる魚』千田哲資より―。

魚離れの進む今日、世界有数の魚食民族である我々日本人は、今一度魚を見直し、魚をよく知る必要があろう。各々の魚種と旬に合った調理法で味わうことが魚をよりよく知る最良の手段であり最善の供養である。

（おかむらおさむ／高知大学名誉教授）

こんなことがあったぞね

城下の青春

中山俊子

大正十(一九二一)年と言えば、今から七十八年も前の古い話になりますが、その年十三歳で私は女学校に入りました。チビッ子であった私が裾に二本白い筋のついたエビ茶の袴をはいて、得意になって出かけると、お隣のおばちゃんが「まあ可愛らしいこと」と言ってくれましたが、いくら小さくても、幼稚園ぢゃあるまいしと内心少々むくれました。私の入学した女学校は今もお城の下、追手筋にある土佐女子中高校の前身、土佐高等女学校でありました。

他の学校でもそれぞれ服装には規則があったと思いますが、わが土佐女の当時の服装と申しますと、

髪型　もつい　髪の毛を後ろで束ね、ぐるぐる団子に丸めてピンで留める形。お下げ髪は不可。

着物　木綿の筒袖　元禄袖は不可。

式服　黒木綿紋付　長袖（三大節・卒業式）。

袴　エビ茶色木綿　裾に白い二本筋。

羽織　冬でも着てはいけない。スカーフも。

靴　学校指定の物。編上は不可。

靴下　黒木綿厚手の物。足のすけるのは不可。

体操服　白木綿半袖シャツ、膝でしぼるくくり袴、黒い大黒帽子。

水泳着　黒メリヤス半袖付、腰廻スカート付。

傘　黒木綿のコーモリ傘。

大体以上のようなものでした。髪をもついに結うて、筒っぽの着物を着て、急におばさんになったようで泣きたいような気持ちでした。

県立高女の方はお下げ髪でもよく、袖も筒っぽではなかったようです。袴の裾の一本筋もスマートで羨ましかったです。袴の紐の所に洒落たバックルの付いたバンドを締めている学校があったと記憶しています。

お洒落したい年頃の女の子達ですから、決められた範囲の中で如何にこうべるか苦心したものです。

さてその頃は、追手筋界隈は東も北も学校だらけでした。先ず土佐女の東隣が城東中学校（後の追手前高）、南側に第三小学校、東へ行って商業学校、北へ行くと県立高女（第一高女・丸の内）、工業学校・実科女（高坂高女）、和裁専門の中村女・宮内女、小津の方へ行くと当時人気No.1の新設高知高校の水色の校舎、海南中学との合併騒動のあった城北中（小津高）、更に西へ行けば師範学校。

当時、土佐女の前の広場は街路樹

もなく広々としていて、登校時は男女学生のラッシュでした。男子学生の服装はほとんど黒詰襟にそれぞれの校章の付いた学生帽で、夏になると霜降りのグレーっぽい服になり、帽子に白い木綿のカバーをかけていました。中で目立つのが高校生で腰に手拭いをぶら下げわざと破ったり汚した帽子で、朴歯の高下駄、中には羽織袴のヒゲ面の学生もいました。その中にエビ茶袴の女学生が交じって、西へ行く者、東へ行く者、北へ急ぐ者と皆朝の生気に満ちて、まさに若者のオンパレードでした。

二階の窓には上級生が顔をそろえて、学生の品定めをしたり、何やらひそひそ話し合ったり下の広場を見ています。学生の中には二階へ向いて手を振ったり、アカンベエをしてふざけるおどけ者もありました。

広場には時々朝倉の連隊の兵隊さんが、行軍や演習の途中の休憩所として、所々に銃を立てて、休んでいました。騎馬の青年将校はとても素敵で、憧れの的でしたが、当時の女学生は純情で、男性と話をしても不良と言われる時代でしたから、別に何事もなくただ淡い夢のような乙女の憧れで、終わってしまったようです。

その頃は男女の学校で運動会やバザーがあっても、行ってはならない事になっていて、双方から監視の先生も出ていたようです。高校生だけは別格でしたから、年に一度のバザーの時、釣りがねマントの高校生が現れると、売り場の上級生はそわそわ、わくわく、ざわめいたものです。

行くなと言われると行きたいもので、隣の中学校へこっそり運動会を見に行った者もおったし、お昼休みに大橋通りの中納言へ団子買いに行って悠々と持ち帰った勇士もおりました。映画（その頃は活動写真）も学校から引率されて行く以外は禁止でしたが、帯屋町や新京橋辺りの文具店の店頭で、ブロマイドを見て、阪妻だ、月形竜之介だ、高木新平だといっぱし映画通もおりました。

映画館は堀詰に鳳館、今の大丸辺りに世界館、新世界に帝国館、堺町に大山館、升形に出雲館がありました。チョコチョコ抜けて行くのは、どこの学校にもあったと思います。出雲館には三階があって、他所の学生と鉢合わせしたと言っていた人もいました。「あんたもその組ぢゃろ」と言われましても、どこかの政治家みたように「記憶いたしておりません」。

電車通学では男子生徒は前から、女子生徒は後ろから乗車するようにと決められていたようです。どうせ真ん中で出会うだろうに、と笑った事でした。

当時の学生は明るく朗らかで、無邪気なアヴァンチュールを楽しみながら、よく勉強もしました。郡部の方から来ている学生は下宿をしていましたが、休暇に帰省するのを楽しみに勉強していました。トラブルなど聞いた事はありません。古き良き時代でした。

あの頃の学校で元の所に残っているのは、追手前と丸の内、校名も元のままは土佐女子だけとなりました。あと三年で土佐女子創立百周年を迎えます。この年になっても朝の学生ラッシュの光景が、鮮明に目に浮かんで来ます。高知高校生が〈一つとせー〉と乱舞しながら唄っていた豪気節が、聞こえて来るようで――。

（なかやまとしこ）

人に志あり

松本秀正

古川物流㈱社長、桐村普次氏は、優れた経営者であり、またたいへんな勉強家である。

彼は、経営者協会が主催するセミナーの講師としてたびたび来高されているが、県教委の「人事管理の在り方に関する検討委員会」の委員や高知高専の参与でもあり、本県とは縁の深い人である。

『社会人大学院物語』

桐村さんは、古川電気工業㈱常務取締役のとき、筑波大学の夜間大学院で、カウンセリングコースの修士課程に学んでいる。同コースを選んだのは、東京大学時代の同級生で、今は筑波大学教授の佐藤一雄氏に紹介されたからである。桐村さんは、夜間大学院の体験を生産性新聞に『社会人大学院物語』という題で、九五年八月から九七年五月まで三十三回にわたって連載し、大きな反響を呼んだ。夜間の大学院に学ぶ社会人学生の真剣な姿が活写されていて、読者に大きな感動を与えたからである。

彼の入学した九五年(五期生)のカウンセリングコースは、受験生三百三十三名、合格者は二十四名で、競争率一三・九倍という難関であった。学生は北海道から九州まで全国から集まり、年齢は二十歳代から五十歳代。職業も企業の役員、学校の先生、大学助教授、看護婦、公務員などさまざまである。

これからの経済社会は、急速な変化に対応できる知的、文化的生産力の高い人材、創造性や個性豊かな人材が求められているが、社会人大学院で学ぼうとする人たちは、いずれも自己啓発に富み、学習意欲が旺盛である。その中の一人、門田美恵子さんを紹介しよう。

養護教諭から教頭先生へ

門田さんは、神奈川県厚木市の小学校の養護教諭。夜間大学院へは、毎日往復五時間かけて通学した。彼女は、いじめや心の悩みで教室へ出られない子どもを、保健室で温かく愛情をもってむかえ、不登校を十三例担当し、すべての子どもを復帰させた実績をもっている。

北海道で育った彼女は、中学を出ると地元の准看護婦養成所に入り、夜は定時制へ通った。だが勉強したい一心から上京を決意すると、慶応病院に働き口を見つけ、都内の定時制高校に編入することになる。そして、養護学校、保健婦学校へと進み、養護教諭となった。

彼女は東京の定時制高校で出会った今のご主人と結婚し、一女一男に恵まれる。門田さんに感心させられるのは、むろん夫の理解と協力があってのことだが、育児や職場生活を続けながら、こんどは通信教育で短大、続いて大学四年課程を履修し、一般教員の資格を取るという、その生き方の目覚ましさである。

そして子どもが手を離れると、今なら勉強に打ち込めれると、筑波大学夜間大学院の門をたたいたのである。彼女の学位論文は『登校拒否児童に対して養護教諭の行なう指導・援助モデルの開発』であった。九六年彼女は、全国でも初めてという、養護教諭から教頭先生へ昇進されるのである。

「これから、これから」

『社会人大学院物語』に登場する人たちは、生き方が真剣で、常に孜孜(しし)として学び、黙黙と努力を続ける人たちである。そして、彼等は目標とする所へ到達しても、決してそれに甘んじることなく「まだ、これからこれから」と、さらに山の頂をめざして、上に向かって足をのばす。彼等こそ志を持った畏敬すべき人たちである。

桐村氏の修士論文のテーマは『ホワイトカラーのキャリア形成』。その論文の概要は、日経文庫『人材育成の進め方』(改訂版)におさめられている。

(まつもとひでまさ/高知県経営者協会専務理事)

ぐうの音も(三)

―詩作りと誌作り―

西岡寿美子

一般の人は「詩」に、何を思い浮かべるだろうか。

まさか、むかし、星菫派と言われた、星だ、月だ、花だ、をイメージする人はもういないだろう。今少し生活感のある、腹にこたえる内容を求めたい。書きたい。詩作の出発点をそこに定める人が多くなったのは、地に足が着いたいい傾向だと思う。

生の現実は絵空事ではない。自我が目覚めれば親子や交友間でも摩擦があるし、進路、就職も望み通りには行かない。人を愛すれば傷付く。競争社会では乗り遅れる。孤立する。何につけ、スイスイとは行かないのが実人生である。

挫折、劣等感、疑心、裏切り、嫉妬、不如意。人の経験すべきありとあらゆる悩みに押し揉まれ、時には内面だけでなく、仕損ねて金銭的な債務を背負い込んだりもする。

あまりの不条理さに堪り兼ね、恨みごとをるる書き綴る、というようなことから、表現の世界へ近付く人もある。寄せてくる苛烈な現実の前に、月だ花だは言っていられない。いわば、そういう切羽詰まった中での偶発的作から、少しばかり意思的作へ、が詩作の大方の経路と思われる。

投稿は、ほぼこの偶発的段階が多く、当座の悩みごとが解決すれば、憑き物が落ちたように詩から離れる。もともと詩など書かなくても済む一過性タイプであろう。今少し入れ込むと常連になるが、実は、ここからが本物の詩人への指向と、生涯ディレッタント(好事家)で終わる岐れ路である。

何事も、楽しむのと、一事を極めるのは違う。最初は自然発生的な身辺雑記に終始していても、それだけでは飽き足らなくなるのが自然の成り行きというもの。何か自分だけのテーマを、と気付いた時点こそ、その人の本物への開眼。詩は志であると言われるのも、その人その人の志の発現だからである。

当然、独自の詩形、独自の語彙が編み出される筈。他者のコピーである間は、独立した表現者とは言えない。アレ、この調子の作品は読んだことがある。この題材や詩形は、確か先に試みた人がいたぞ。と思われるようでは未熟の謗りは免れない。中でも他人のフレーズを取り込むなどは論外。精神において表現者失格である。

古歌などを下敷きとする本歌取りも、あまり拠り掛からない方がいい、とわたしは思う。オリジナル(独創)の点で最初から敗れており、本歌取りが本歌を超えても、土台の想の借りを差し引けばさして手柄とは言えまい。絵でも、今更ピカソやゴッホをなぞっても、亜流と笑殺されるようなものである。

近年、全国から詩集、詩誌を多数頂戴する。内容は百花繚乱の盛況だが、うむ、と座り直す作品は、残念ながら百冊に一、二冊だろうか。

虚名に魂を売った詩人もいれば、無名でも志の真摯さで真っ向から撃って来る人もいる。それは、現在の稚拙に潜む、当人にも見えない未来の、鳥肌立つその人の完熟像に共鳴りする、極めて稀な至福の時にこちらも恵まれる瞬間、でもあろうか。

(にしおかすみこ/詩誌「二人」編集発行人)

高知を撮る
第16回写真コンテスト入賞作品

チリ津波に襲われた須崎市商店街

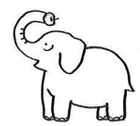
（昭和35年　須崎市）

横川宝喜

1960年5月23日チリ地震により、24日未明から早朝にかけて、日本の太平洋沿岸に津波が到達した。多ノ郷商店街を、流出した木材が覆う。

星の王子さま

風俗歳時記



本年6月29日は、飛行家で、童話『星の王子さま』の作者サン＝テグジュペリの生誕百年記念日。

同書は、1943年に刊行されて以来、百四十余りの言語に翻訳されていて、世界各地で記念行事が続いている。

本家のフランスは、言うまでもなく、〈王子さま〉一色。

この日、作者の生まれ故郷では、「リヨン空港」が、「サン＝テグジュペリ空港」と改名。

作家の肖像と飛行機・王子さまを、表裏にデザインした50フラン紙幣も発行されている。

日本の〈王子さま〉熱も相当なもの。

同書の日本語版は、岩波少年文庫の一冊で、1953年の初版発行以来、約五百万部に達しているベストセラー。

NHKは、「星の王子さまと飛ぶ空中大紀行」と題する二時間番組を放映。ハイビジョン撮影によるフランスからアフリカに至る三千五百キロの空の旅。

その合間に、この飛行家の他の作品、『夜間飛行』、『人間の土地』、『南方郵便機』、『戦う操縦士』などが随所に引用されて、作者の思想が語られる。

また、「だんご3兄弟」で一躍有名になった茂森あゆみ主演のミュージカル「星の王子さま」の上演。

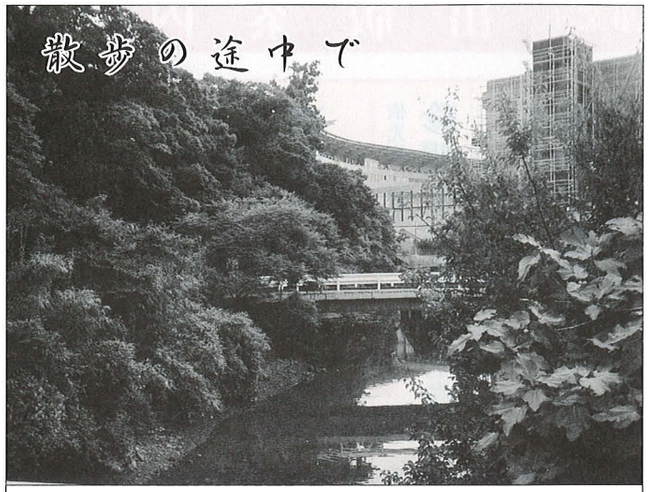
さらに、オリジナル版『星の王子さま』をはじめ、サン＝テグジュペリ関連本のあいつぐ出版。

最後に、題名について一言。

原題は『ル・プチ・プランス』。直訳は「小さな王子」。世界各国で、そう訳されている。

『星の王子さまからの警鐘』の著者山本武信氏によると、これを『星の王子さま』と訳した、仏文学者内藤濯（あらう）氏の功績は大きい。

「作品に内在する意味を拾い上げた名訳」である、と言う。（朴）



天神大橋の大クスノキから提を西に入ったところ、水門で区切られた鏡川の小さな支流、小石木川がある。背景の威容を誇るスタジアムと繁ったみどりの対照がきわだつ。

けっして清流とは言い難い、通る人が目を留めることもないひっそりとした流れだが、季節を感じることのできる一角である。――秋を待つイチジクの青い果実がたわわに実っていた。

風伯

頑張れ国鉄

季節の移る度に国道381号線に出かけてゆく。特に窪川町から西土佐村江川崎までの四万十川に並行した約60キロの区間が素晴らしい。新緑の、紅葉の、盛夏の濃厚な緑の、そして冬枯れのこの道を時速70キロを保ってひた走る。そんなドライブのできる道は他にもあるが、たまに出合う前車を追い越す際に、自分が非道く野卑で下品な行為をしているように感じさせる雰囲気はこの道独特のものだ。作家堀田善衛が晩年に最も好んだとされるジャック・ルーシエトリオの『プレイバッハ』を伴奏にしながら走るのが実によく似合う。

更に嬉しいのが改良工事前の旧道がかなり残っていることだ。この部分を通るときには伴奏音楽を切り真冬でも窓を一杯に開く。川の瀬音、風の気配、鳥の声など、車を取り巻くあらゆる空気に身をゆだねてゆっくり走る。

そしてもう一つ、十和村内で予土線駅舎の案内板が道に出ているが、それにはあの懐しい色の国鉄ブルーで国鉄土佐昭和駅と国鉄十川駅とまことに堂々と標示されている。ここではジェイアールなどという下品な響きの言葉は似合わない。国鉄という凛乎としたイメージの駅舎が誇り高く頑張っているのだ。

《昭和最後の秋のこと　山の紅葉に照り映えて　色づく夢が　色づく夢がまだあった
ふるえる愛が　ふるえる愛がまだあった》

昭和12年生まれの作詞家阿久悠の詞による『昭和最後の秋のこと』のこの終わりのリフレインをいつも口ずさみながらここを通る。（南北）

賛助会員募集中

年会費2000円で
どなたでも入会できます

ご入会いただくと……

「文化高知」を年6回
お手元にお届けします。

事業団発行の書籍を
10%割引いたします。
（事業団で直接お求めの場合）

お申し込みは……
事業団にお電話でどうぞ。
次号に郵便振替の用紙を
同封してお届けいたします。

今号の表紙

「いろとあそぼう ACT99」

増田和剛

人間模様が多種多様化する世の中で、「いろ」の可能性は、出会う人の数だけ存在するんだと実感しました。私にとっての出会いは、表現活動のエネルギーにかわり、そして作品として生まれかわる。

このシステムは今後もかわらず、常にいろのある世界で生きていきたいと願っています。（ますだかずたか・美術作家）

文化高知 No.97 [隔月発行]
2000年(平成12年)9月1日発行

財団法人 高知市文化振興事業団
〒780-0870 高知市本町五丁目2番3号
TEL&FAX(088)873-4365/郵便振替01680-5-14869

高知市文化振興事業団 出版案内

外崎光広 著

土佐自由民権運動史

著者の四十年に及ぶ研究を集大成。新資料による知見も盛り込みながら、土佐自由民権運動の全容を通史として明らかにした。
A5判・上製本・四二四頁 本体価格二、七一九円

外崎光広 編

土佐自由民権資料集

土佐自由民権に関する基本的資料百十余点を事件別に分類・収録。原資料によって各々の事件の実態が把握できるようにした。
A5判・三四四頁 本体価格三、〇〇〇円

土居重俊・浜田数義 編

高知県方言辞典

古語から現代語にいたる土佐言葉一万四、七〇〇余の意味、用例、使用地点等を明示、注釈も加えた土佐方言唯一最大の辞書。
A5判・上製本・七三六頁 本体価格六、〇〇〇円

依光裕 編著

珍聞土佐物語(上巻)

——五十人の語り部たち

土佐の山や海辺の村の囲炉裏端で古老が語った地元の伝説や小咄の数々。ここでは地域別に二十名の語り部の百三十話を収録。
四六判・三九二頁 本体価格一、五五三円

依光裕 編著

珍聞土佐物語(下巻)

——五十人の語り部たち

県下各地の様々な語り部三十一名から寄せられた百二十話を採録。親から子へ、孫へ語り継ぎたい「ふるさと」がここにある。
四六判・四〇八頁 本体価格一、五五三円

岡林清水 著

高知県文学散歩

高知県の文学を地域に即して紹介、その舞台、歴史、作家の足跡等を訪ねて歩く〝旅のなかの文学史〟ともいえる文学案内。
四六判・二七八頁 本体価格一、七四八円

山本大 著

幕末の青春

——坂本龍馬の生涯

激動の幕末期を駆け抜けた坂本龍馬の一生を、史実に基づき分かりやすく描いた、子供から大人まで親しめる屈指の龍馬伝。
四六判・一六八頁 本体価格一、一六五円

藤本稔子 著

思いっきりみとめて子育て

——子育て 個育て 親育ち

保育者としての長い経験からみた子どもたちのいきいきとした姿。その豊かに育っていく過程を描きながら子育てを考える。
四六判・三五二頁 本体価格一、五五三円

高知市文化振興事業団 編

わがまち百景

——21世紀に伝えたい高知市の風景

高知市の誇りとして残したい風景を百カ所選定し、百人の随想と写真で紹介。様々な視点からの素晴らしい高知が実感できる。
A5変型判・二二四頁 本体価格一、一六五円

高知市文化振興事業団 編

高知のエスプリ

——ふるさとの未来(あす)を考える

県内のオピニオン・リーダー五十人が、各々高知へのあつい思いを語る。「文化高知」巻頭文からカットとともに収録した。
A5判・一六〇頁 本体価格一、一六五円

高知の文化を考える会 編

高知の文化を考える

文化について多方面から検討、豊かで個性的な市民主体の高知の文化をどうつくり発展させていくかを、市民的立場で考える。
A5判・一八八頁 本体価格一、一六五円

清水孝之 著

中山高陽

土佐の生んだ江戸文人画の祖中山高陽の業績を明らかにした労作。資料として未発表のものを含む書簡集・年譜等を収録した。
A5判・上製本・三六二頁 本体価格三、八〇〇円

筒井広道 著

画帳の歳月

高知画壇の重鎮の、美と画業についての随想集。県展の知られざる内情、肩のこらない絵画論等、興味尽きない美術への誘い。
A5変型判・上製本・二五六頁 本体価格一、九四二円

高木啓夫 著

土佐の芸能

——高知県の民俗芸能

現存する土佐の民俗芸能をくまなく収集し体系化。それぞれを神楽・獅子舞・地芝居・太鼓踊り・民謡等に分類し、詳説した。
B5変型判・上製本・三四六頁 本体価格四、八〇〇円

土居重俊 監修
高知市文化振興事業団 編

土佐弁 土佐日記

紀貫之の名著『土佐日記』を、現代とさことばでつづる。古典を身近なものにするとともに、土佐弁にも親しめる楽しい本。
B6判・上製本・一三〇頁 本体価格九七一円

高知県緑の環境会議 森林研究会 編

高知の森林

高知の代表的な山と森林をつぶさに探訪し、残されている貴重な自然や植生、森林と人々とのかかわりの歴史、現地への道のり等を紹介。
B5変形・二二八頁 本体価格二、四二七円

http://www.i-kochi.or.jp/hp/bunshin E-mail bunshin@i-kochi. or. jp